

(ノート)

アゲマキ漁獲の再開

佃 政則・野間昌平・江口勝久・野田進治・梅田智樹

Restart of *Sinonovacula Constricta* Harvest on the Coast of Saga Prefecture in Ariake Bay.

Masanori TSUKUDA, Shohei NOMA, Katsuhisa EGUCHI, Shinji NODA and Tomoki UMEDA

1. はじめに

アゲマキは1993年まで有明海湾奥部沿岸で漁獲された二枚貝であり、漁業資源として重要であった。1994年以降ほとんど漁獲がない状況であったが¹⁾、資源回復に向けた取り組みにより²⁻¹⁸⁾、2015年から佐賀県鹿島市周辺において天然発生個体が多数確認され始め、その後、2016年、2017年と発生量が増加する傾向がみられた²⁾。

鹿島市周辺において、2015年に大量発生が確認されたから3年が経過し、一部では漁獲サイズに成長したアゲマキも確認されることから、地元漁業者から漁獲の要望が上がるようになった。この要望に対して、資源回復の取組を維持しつつ、一部で漁獲利用をするためには、資源の状況を正確に把握する必要があることから、佐賀県では、アゲマキの生息状況調査を2018年2～3月に実施した¹⁹⁾。その結果、推定資源量が310万個であり、およそ20.2 tと推定した¹⁹⁾。

これらの結果をもとに、2018年4月から関係機関と漁獲再開に向けた協議を開始し、6月に漁獲再開となった。そこで、本報告では、この協議から漁獲までの過程やその結果を示し、持続可能な漁獲と資源の回復について検討した。

2. 漁獲再開までの協議

上述のとおり、2018年3月に実施した調査では、鹿島市の塩田川および鹿島川河口域、浜川河口域、七浦地区の3地先で、資源量として307万個、20.2トンが現存し、特に、鹿島市の一部で漁獲可能な殻長60mm以上のサイズの個体が確認された¹⁹⁾。1996年に漁獲が激減して以降、

表1. 関係機関の役割

| 機関 | 役割 |
|-----------|--------------------|
| 佐賀県 | 資源量調査、資源状態を評価 |
| 漁業協同組合 | 漁場管理、漁獲案を作成 |
| 海区漁業調整委員会 | 資源と漁獲案から委員会指示継続を判断 |

佐賀県のアゲマキ漁に対する規制は、佐賀県漁業調整委員会指示により、2002年～2016年まで殻長による採捕制限があり、2016年からアゲマキの採捕は全面的に禁止されている。

表1に今回のアゲマキの採捕に関する機関の役割を示す。県は、アゲマキの資源調査を行い、正確な資源量を把握し、漁協へ資源管理の助言を行う。漁協はこの評価・助言を受け、漁場の管理や漁業権の行使のために、漁業調整委員会へ漁獲の提案を行う。漁業調整委員会は、資源の状況と漁獲案を総合的に判断し、漁業調整委員会指示の継続の有無を判断する。

今回、佐賀県では、漁業者からの漁獲の要望に対して、資源回復の流れを止めずに、一部で漁獲利用をするために、資源の利用方法を検討した。この検討には、今回の資源量調査結果から、資源回復が鹿島市の地先に限られること、また、アゲマキの生態的特性から、アゲマキが産卵可能となるまでに生まれてから1年以上、漁獲サイズに成長するまでに2～3年程度かかることなどを考慮し、図1のように漁場の利用計画を作成した。この漁場利用案では、資源の維持・拡大を図るために、浜川筋の高密度域を母貝場とした。次に、60mm以上の個体が多く生息し、一定の漁獲が見込まれる漁場を2018年に漁獲する漁場、60mm以下の個体が多く来年度以降に漁獲が可能な漁場に区分けし、数年で漁場を利用する輪作の考えを盛り込んだ。

佐賀県は、2018年4月に資源量の状況および漁場利用計画を有明海漁業協同組合（以下、「有明海漁協」とする）に説明し、今後の資源回復の方向性と漁獲再開の可能性について協議した。その後、有明海漁協内で漁獲再開という意見と、時期尚早でさらなる資源回復の継続が必要という意見とがあり、協議が重ねられた。有明海漁協は、今後の資源回復の過程で、漁業者の漁獲圧を試

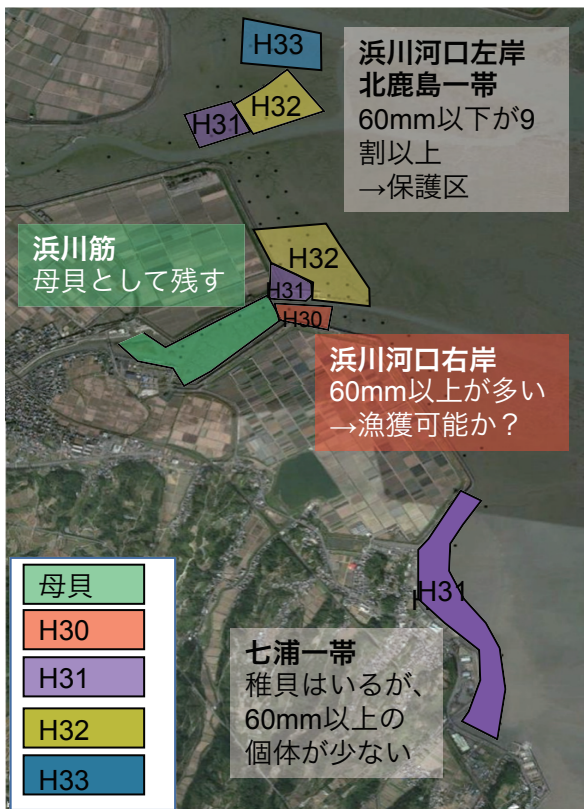


図1. 漁場利用計画図

験的に把握する目的も兼ね、過去にアゲマキ漁獲を行ったことのある漁業者6名を選定し、6月の15日間に限り漁獲を再開する案を作成した。

有明海漁協が作成した漁獲案については、5月の佐賀県有明海区漁業調整委員会で諮られ、6月の1か月間に限り、現在、全面的に採捕禁止となっている漁業調整委員会指示が解除され、漁獲の再開が決定した。しかしながら、調整委員会指示が解除されたことで、共同漁業権対象種であるアゲマキは、漁業権を持つものであれば誰

表2. 漁獲再開期間中のアゲマキ漁獲量

| 大 | 中 | 小 | 合計 | 再放流 | 出荷量 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 149 | 675 | 155 | 978 | 155 | 824 |

(有明海漁業協同組合資料より)

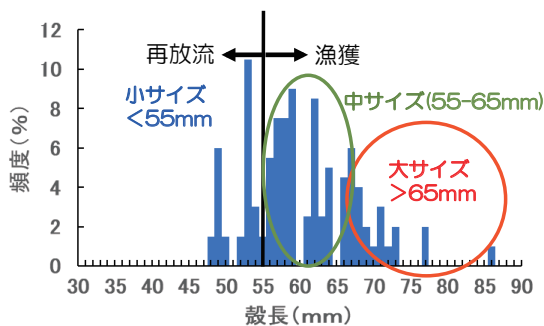


図2. 漁獲個体の拡張頻度分布図



写真1. アゲマキ漁獲、選別、せり、販売の風景

でも採捕可能である。そこで、有明海漁協では、共同漁業権行使規則に基づき、有明海漁協が定めた操業場所、操業期間、漁獲サイズ以外の採捕を禁止し、また、採捕者を限定することにより、資源保護と漁獲再開を同時に進めた。

3. 漁獲再開と地元の反応

アゲマキ漁獲は6月8日から漁場利用案を基にした有明海漁協の指定する浜川右岸の100m × 300mの範囲で再開され、初日の漁獲は64.8kgであった(写真1)。漁獲物の殻長頻度分布図を図2に示す。漁獲物の大サイズ(70mm以上)、中サイズ(55~70mm)は出荷され、小サイズ(55mm以下)は放流された。6月の15日間で約1トン漁獲され、824kgが市場や直売所へ出荷され、155kgが小サイズということで放流された(表2)。このように、漁協内で操業場所、操業期間、漁獲サイズを定めて、資源保護に取組みながら漁獲が実施された。

漁獲されたアゲマキは、6月9日に、有明海の特産漁獲類が多く出荷される地元の魚市場へ出荷され、久しぶりの天然有明海産アゲマキということもあり、大いに賑わった。せり値についても、初日は3,000~4,000円/kgと非常に高値が付き、期間を平均してもおよそ3,000円/kgと、30年前に漁獲されていたころのおよそ800~1,500円/kgと比較すると、高評価を得た。

また、一部は有明海漁協の直売所である「まえうみ」に出荷され、販売開始2時間前から長蛇の列となり、販売開始直後におよそ20kgが完売した。購入した方の話では、「20年ぶりにアゲマキを見て感動した」、「もう一生食べられないと思っていた」など、アゲマキがいかに地元で根付き食されていたものであったか、そして、資源回復への期待が高かったのかが伺えた。また、「この

漁獲が来年以降も続いてほしい」など、アゲマキの資源回復へのニーズが非常に高いことから、今後もアゲマキ資源回復を拡大する取組が必要である。

4. 持続可能な漁獲と資源回復を実現させるために

今回、漁獲再開した漁場の事前の資源調査の結果では、資源量はおよそ1トンと推定していた。6月の実際の漁獲量は、およそ1トンであり、事前の推定資源量とほぼ一致した。このことは、前報で報告した資源量調査で、おおむね正確にアゲマキ資源が推定できることが明らかとなり、今後の資源量推定においても十分に活用できる手法であると考えられる。一方で、一旦漁獲に踏み切れば、漁獲した漁場のアゲマキをほぼすべて採り尽くすことも明らかとなり、アゲマキの資源量の把握と、計画的な漁獲というものが今後非常に重要となると考えられる。

現在、資源回復が佐賀県の中でも鹿島市周辺の限られた地域であることから、今後、有明海湾奥部全域での資源回復のためには、放流による母貝集団の創出などの回復に向けた取組みを継続しながら、計画的に漁獲を進める資源管理を徹底していく必要がある。

文 献

- 1) 農林水産省 (1980～2013) : 第26～59次佐賀県農林水産統計年報.
- 2) 佃 政則 (2017) : 種苗放流によるアゲマキ母貝集団づくりと資源の現状. 豊かな海, (43), 16-21
- 3) 異儀田和弘・中村展男・谷 雄策・伊東義信 (1977) : アゲマキ *Sinonovacula constricta*(LAMARCK) の水槽採苗について. 佐水試業報, 13-17.
- 4) 古川泰久・伊藤史郎・吉本宗央 (1998) : 餌料藻類3種のアゲマキ稚貝に対する餌料価値. 佐賀有明水振セ研報, (18), 21-24.
- 5) 古川泰久・伊藤史郎・吉本宗央 (1999) : 干潟の泥を用いたアゲマキ稚貝の飼育. 佐賀有明水振セ研報, (19), 37-39.
- 6) 伊藤史郎・江口泰蔵・川原逸朗 (2001) : アゲマキ浮遊幼生の飼育と課題. 佐賀有明水振セ研報, (20), 49-53.
- 7) 大隈 斉・山口忠則・川原逸朗・江口泰蔵・伊藤史郎 (2004) : アゲマキ種苗の大量生産技術開発に関する研究. 佐賀有明水振セ研報, (22), 47-54.
- 8) 大隈 斉・江口泰蔵・山口忠則・川原逸朗・伊藤史郎 (2003) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟. 佐賀有明水振セ研報, (21), 45-50.
- 9) 大隈 斉・山口 忠則・伊藤史郎・牛原祐司・林 重徳 (2003) : 有明海佐賀県海域における天然アゲマキの発生. 佐賀有明水振セ研報, (21), 41-43.
- 10) 津城啓子・大隈 斉・藤崎 博・有吉敏和 (2009) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟 - II. 佐賀有明水振セ研報, (24), 1-4.
- 11) 津城啓子 (2011) : 有明海佐賀県沿岸域におけるアゲマキの分布状況. 佐賀有明水振セ研報, (25), 17-25.
- 12) 津城啓子・佃 政則・大隈 斉・古賀秀昭 (2013) : アゲマキ放流稚貝の生残・成長と底質 (物理環境) との関係. 佐賀有明水振セ研報, (26), 25-31.
- 13) 津城啓子・佃 政則・大隈 斉・古川泰久 (2013) : アゲマキ稚貝 (7～8 mm) の生産技術マニュアル. 佐賀有明水振セ研報, (26), 93-100.
- 14) 佃 政則 (2017) : 穿孔基質の違いによるアゲマキ殻長と巢穴面積との関係. 佐賀有明水振セ研報, (28), 29-31.
- 15) 佃 政則・伊藤史郎 (2017) : アゲマキ種苗生産における穿孔基質の検討. 佐賀有明水振セ研報, (28), 33-37.
- 16) 佃 政則 (2017) : アゲマキ稚貝の成長に伴う這い出し移動行動の変化. 佐賀有明水振セ研報, (28), 39-41.
- 17) 佃 政則・神崎博幸・福元 亨・梅田智樹・荒巻 裕・伊藤史郎 (2017) : 被覆網による放流後のアゲマキ稚貝の散逸対策. 佐賀有明水振セ研報, (28), 43-45.
- 18) 佃 政則・神崎博幸・津城啓子・福元 亨・梅田智樹・荒巻 裕・伊藤史郎 (2017) : 佐賀県有明海沿岸におけるアゲマキ分布の変遷. 佐賀有明水振セ研報, (28), 47-49.
- 19) 佃 政則・野間昌平・江口勝久・野田進治・梅田智樹 (2019) : 有明海佐賀県海域におけるアゲマキの分布と資源量. 佐賀有明水振セ研報, (29), 1-4.